

稀少な文書の付属物：虫



図1 「武田勝頼書状」[(1580年-推定天正8年) 5月12日]



図2 フルホンシバムシの幼虫



図3 フルホンシバムシの成虫



図4 セイヨウシミ

本年七月十四日より九月十三日まで、「真田丸」(NHK大河ドラマ)に關係した展示を当館特設コーナーにて開催する。図1は、そこで出展される「武田勝頼書状」である。本文書は、当館だけでなく、長野市立博物館でも巡回展される(九月十七日〜十月三十日)。是非皆さんに観ていただきたい。また、書状の解釈については、展示説明を参照されたい。

当館には「信濃国松代真田家文書」がある。真田家文書は、信濃国松代藩の大名真田家に伝来した史料群である。家史料・藩庁史料双方にかかわる日本有数の大名文書群といえる。当館の史料は、そのうち藩庁史料が中心を占め、総レコード数万二千件超である。紙史料の保存を専門にしているとやたら妙なところに気づくもので

ある。文書を読むのではなく「視る」と、虫穴・虫喰い跡が多く残されている。まさに「シバンムシ類」の穿孔である。もし生きて棲みこんでいたのを観察したのなら、図2のような姿であつたらう。さて、この穿孔の「シバンムシ類」の種類は何であらうか。古く貝原益軒は「書籍の表紙などにしみの子生付る事有其ままをけば生長して害をなす」(『万宝鄙事記』巻五、宝永二(一七〇五)年刊)と記し、「しみ」紙魚、箔虫と呼ばれた体が銀色に光る「ヤマトシミ」を害虫と信じていた。多くの文献にも書籍害虫の筆頭にあげられてきたのがシミ(図4 セイヨウシミ)で、一般的にもそう確信している人が多い。しかし、文書の穿孔は「シミ」の仕業ではなく、「シバンムシ類」の幼虫によって喰われた跡なのである。幼虫の時しか喰痕を残さない。成虫になれば結婚相手を探すだけになる。紙の敵はだいたいこのシバンムシである甲虫類だ。小さいミジンコみたいな透明だが黒く見え、湿気た古本を開けると、チチチチと歩くのは、チャタテムシである。湿度七〇%位で多く生息し、センサーの役割をはたす。また、小羽根のあるイガやメイガは繊維に付くが、シミのように表面をなめる程度で、穿孔跡は残さない。

このくらいの食痕の場合、フルホンシバンムシではなく、孔道が太めなのでケブカシバンムシかザウルシバンムシのいずれかではないかと推測される。西日本で被害が多いのはザウルシバンムシであるが、確定は難しい。成虫(図3)は家庭でも見かけることがある。

当館では、古書店から資料を購入することが多く、その際このような虫がよく「付属」してくる。稀少な資料の付属物だが、残念ながら生きていることがあり、収蔵物として登録されることはなく存在の記録と画像が残される。生存していれば、詳細に種類も判定することができる。

(青木睦)